



# 友林蘇岐

- 研究
- 膠材の立木浸染法
- 木に練りて魚を求めよ
- 栗林開闢法の二ツ三ツ
- 小川事業區に於ける伐木運材事業概況
- 文藝
- 山小屋雜話
- たわごと
- 通信
- 入學試験及入學式
- 會員動靜
- 新卒業生任地
- 塚原先生謝恩金募集廣告
- 以上

（日五廿月五年一十正大） 日五廿月五年一十正大 （日四十月六年四十四治明）  
 可認物便郵種三第

## 号一十五百第

### 膠材の立木浸染法

三村林學博士講話

私は大正五年から立木に染料を吸はせて其邊材を染抜く事の試験を重ねて居つたがこの法は樹木の生長期間でなければ行ひ難いので、昨年四月發動機を据付けてから、「ロータリポンプ」を用ひて樹幹を染抜く試験に着手して、四米のもの迄可能なることを明かにした。尤も此機械が尙優良のものであれば、一層長尺のものを染抜くことが出来るが、長いものだけ時間を要し、唐木擬ひの床柱を製する以外は、木象嵌或ひはロクロ細工資料の染抜が主目的であるから一二尺ものを早く染抜けば足る。樹木は其の天賦の通發作用に依つて、百數十尺の高さに水を吸ひ上げ得る。併し斷幹に人工で染料を吸上げさすのは不可能の様に思はれる、所が、之を實地に試みて其容易なるに一驚を喫した。腐蝕の爲めに洞のあるものでも、其斷幹の上下切口を一貫した穴のない限りは染抜き得るので、節瘤の材から唐木擬ひの置物或は床柱を製するには此法が最も適して居る。併し多くの樹木は其心材は染抜き得ざるが故に、丸柱なら差支ないが角材は取り難い。がカシ類シデ類は比較的厚く染抜くことが出来る、のみならず導管が放射狀に並列して居り、染料は其細胞膜を染めるから、之を角取ると雨緋の様な縞模様が見れる

そして赤色を用ひたものは空模様の圖案となり、其他意外の資料が得られる。故に單に木象嵌、ロクロ細工の方面に一新機軸を來し得る許りでなく、木工品に嶄新の資料を與ふる事となる。

樹木の葉に千差萬別ある如く、其材の組織も種々異つて居る。然し之を林學上類別すると先づ針葉樹と闊葉樹となる。針葉樹材は主として假導管から組織さたて居り（一）樹脂溝を有せざるもの、（二）假樹脂溝を有するもの、（三）樹脂溝を有するものに類別される。闊葉樹材は導管の配置に依つて、（一）環孔材、（二）散孔材、（三）輻射導管線材、其他二類に分たれて居るが、五類に屬するものは「ひ、らぎ」其他數種で、二類に屬するものが最も多い。是等の斷幹を染抜くに際し、導管の大なるもの、及び數の多いものは、自ら容易なるも、一及二類では心材の導管は染料を通過せしむる事困難なるが故に、自然邊材部のみが染抜かれる事になり、隨つて邊材の少い樹幹は早く染抜き得る代りに、中廣の板は取れぬ。例せば長野縣は落葉松の適地であるだけに其人造造林が多く、細い間伐材が多量に出來、之が有利の用途を尋ねるやうになつた爲、之を染抜き、ロクロ細工資料とする事を思ひ付き、試験をすると、杉の間伐材に比し、三分の一の時間で染抜き得た。然るに之を縦斷して見ると、杉の染まつて居る部分が落葉松の三倍あつて、杉からは木象

嵌資料を探ることが出来るが、落葉松からは出来ない。所が之をロクロ細工にするに落葉松は染抜けない部分が模様になつて出るので、頗る雅致あるものとなつた。次に栗は他樹種を浸潤することの困難な紫色を容易に吸ひ上げるが、之れを横断して見ると、二分の邊材部に浸潤して居るに過ぎぬので、ロクロ細工の資料にすることは出来ぬけれど、亞皮部は紫赤を並べた様に紫色して居るから、それ相應の用途はある。斯様に各樹其組織を異にするに従つて、染抜状態も違ふので、木工製作資料としては實に無数の斬新なものを得ることが出来るのである。輻射導管線材と云ふのは、導管が髓から周圍に放射線状に並列して居るのを云ふので、カン類は殆ど凡て之に屬シデ類ハシバミ類もこれに屬する。然して前者は暖帯地方以後の二者は温寒帯地方に繁茂して居る。之らの中心材の着色甚だしきものは染抜きに適せぬが、シラカシ、ウラジロカシ、アラカシ等の邊心兩材の着色の差著しくないものは、染抜に好適である。輻射導管線材は是等導管内を染料が通過し、其細胞膜を染め、その間に介在する髓線は着色しないので、赤く染抜いた幹を横断すると恰も聯隊旗の旭光に見え、更に多少斜に鋸断して飽削すると、風に翻る聯隊旗の様である。若しそれ水平線上に現はる、旭日を眺めるとせば、睫に反射する光は旭日より御光が射す様に思はせるから、之を圖

案にすれば、恰度赤く染抜いた橙の断材の方向線と一致すべく、其の斜断面に現はる、振るへた方向線は、漣に映する旭光の様に現はるので、之を旭日照波の意匠としても差支ないと思ふ。次にこの横断或は斜断面の中心に佛像を象嵌すれば、それより御光がさす様にも現はる。カン類の染抜材は斯の如き偉觀を呈するが、更に工藝上面白いことは五六寸位の幹が全部染抜けること。他の樹種では二寸位の太さのものでも中心は染抜けぬものと全く趣を異にして居る。従て旭光模様の範圍が廣くなり、其縦断面は柱目から板目に變ずる角度によつて、無數の種様を現はすから、是等染抜材を利用することに依て、美術工藝界に一新機軸を出し得る事は疑ひないのである。(了)

### 木に縁りて魚を求めよ

菊池生

木曾谷に櫻花が散つて人の心も静になつた山々に見渡す限り若葉青葉に包まれて小鳥が嬉しうに鳴いて居る。蘇水も遽に温み川の魚が活動を始め出した。是れから木曾人の天下だ。此頃の朝晩の氣持のよいつたらない。扱て此上の慾には美味い物をたべたい。此地では新鮮な獸肉や海魚は得られない。臭氣の甚だしい干物がある。又それも矢鱈に詰め込んだら非道い目に逢ひかねはせぬ。そうなるに川魚に頼るより仕方がな

い。幸木曾には、カジカを始めとしてアカウラ、クナビラ、シヤマの類が居る。鰻や鯉も居るには居るが少ないのと高價なので餘に當にする譯には行かぬ。私は嘗て本紙にて木曾谷の魚族を論じた事があつたが、魚類を保護しその繁殖を謀る事が木曾の人々にとつての急務である。殊に夏時は各自の膳の上に毎晩のやうに幾匹づ、かを使へたい。今度木曾には漁業組合が設立される事になつた。電力會社の寄附金に依つて養魚池が二ヶ所にも出来るさうなとして、アカウラや鰻鯉をも放流する計畫がある。云ふ。そうしたら吾々の腹中へ其等の美肉が容易に飛び込む事にもなるだらう。

併しそれは果して何日の事か、扱て養殖計畫中にクナビラとシヤマの話がなかつたやうだ、クナビラもシヤマも年々甚だしい勢で減少する、兩者共にある時期に於てはアユと劣らぬよ味がある、之が保護を等閑に附したでは折角の名物がやがて絶滅する恐れがある。今日クナビラとシヤマの關係は依然として學界の問題となつて居る。シヤマは鱈の子であるかも知れぬがしかど斷言は出来かねるといふ(林友白四十五號參照)

「動物學提要飯島博士によれば鱈の幼稚なるもの並に海に下らずして生殖するに至るものを、ヤマメ、ヤマベ、アメノウラ、アメゴ等と呼ぶ」とあり。クナビラは各地に

産するらしいが方言が非常に多いので調査に骨が折れる。そしてシヤマに相當するものは飛騨にシヤマといふのが有るが其他の土地では何と呼ぶか不明である。クナビラとシヤマとは素人には殆ど區別が付きかねる程よく似て居るから地方に依つては混同して居るではあるまいかと思はれる。

クナビラと鱈との間に雜種が出来ることも云ふ人があるが私はまだ確める事が出来ない。諏訪地方ではヤマメの外にアメマスとか云ふ物があるが、木曾の物と比較して見れば何とも云へぬ。兎に角木曾谷では今後鱈を見られまいから此興味ある問題も茲では解決が出来なくなると思ふ。

- イ、クナビラは數多くシヤマは尠ない
- ロ、クナビラは尺余に達するものがある
- ハ、クナビラは産卵後黒色となるシヤマは光澤強く、黒色とはならぬ
- ニ、クナビラは十月頃産卵するもシヤマは産卵を見たる人なし
- ホ、クナビラは産卵後より三四月まで頗る味が悪いシヤマは十月過ぎ殊に美味だ

其他釣れる時期、網で捕れる時期も違ふ、三月始めはクナビラよりもシヤマが多くとれるらしい。シヤマの斑点は成長するに従つて不判明になる。ホルマリン液等に漬け

たものではクナビラとシヤマの區別が二つ並べられても見分け難い程だ。要するにクナビラとシヤマは別物である事は明かである、シヤマは七八寸位までの物しか見られないとするとそれから海へ降るかもしれない。シヤマは福島地方では産卵せぬものとする。と仔魚は何處から来るものか、論点になる鱈の子であるとするは鱈が來ぬ時はシヤマが居らない事になる筈だ。電燈會社の堰堤の爲めに潮の事が出来ない、従つて將來はシヤマが見られないだらう、シヤマ減少は電燈會社の發展と密接の關係がある。然るに鱈の卵を漁業組合が孵化し之を川に放したとすれば今後シヤマが盛にされる譯になるであらう。

山間部に限らず國中の魚類が年々減少して行く。山間部での御馳足としては、獸の肉や茸の類もあるにはあるが矢張川魚だ。之が保護繁殖に極力努力せねばならぬと思ふ。所で養魚池を設けて幼魚を育て之を川に放つたら魚が直ちに川に充滿する事と飛び上つて喜ぶ人も福島にはあるさうだが果して豫想通り魚が成長するかどうか又増加するかどうかは疑問であるうまく行けばそれは運がよいので、一寸考ひて見てもすぐわかる事だが、水量、水質、水温の外に餌や害敵等も充分に調べる必要があるよしんば、水質も水温にも適する魚族を他所から持つて來て放したからとて餌がなくては

育つものではない。水量、面積と餌には限りがある。従つて川には繁殖し得る魚の分量にも局限と云ふものがある。而して水量を餌に最も重大關係を有して居るものは森林である。木曾谷が今日の様な状態であつては魚族の増加は覺束ない。繁殖したとしてもそれはしれたものである。木曾川に限らず現在の日本の状態では心細い、私は先づ森林方面を注意して貰ひたい、土砂を流し込み川を散々荒して置いて養殖事業もないものだ。山をこもり茂らせる事が先決問題だ。魚の餌が多くなる、魚の休息所も出来る。魚を得やうとするならば先づ山を林をこ私

### 栗林開園法の二二三

伊藤生

古い謂ひ草ではあるが二兎を追ふ者一兎を得ずと謂ふ古語がある、然し若し二兎なり三兎なり追つても皆捕へ得らる、事があるとすれば、夫れは面白い事では無いか、イヤこれからの人間はこんな事を心掛けねば忙しい生存競争に打ち勝つて行く事は出来まひ、勿論二兎なり三兎なりを追ふ爲めに一兎も得ないと謂ふ様な馬鹿氣た事をしではしつたが無いが! (應々慾深かい人間にはこうした馬鹿氣た事が有勝だ) 而して吾々の仕事の中にはこんな面白い仕事はいくらもある、其の中では栗の栽培は面白い



る。

(一) 作業級

本事業區を分ちて

- 第一 皆 伐
- 第二 造神宮備林
- 第三 造神宮臨時備林

第一は、説明するまでもない林産物の收入を目的とする經濟林であり、第二は神宮御造營に要する御用材を養生するを目的とし、第三は、第二と同一目的であるが、第二と異なる處は第二の、遠き將來に於て御用材となるべき大樹を産出せんとするに對し、第三は現在若しくは近き將來に於て御用材に備へたる森林である各作業級の面積は左表の通である

作業級	面積(畝)	割合%
1	四、五二、三二	七〇、五
2	一、四四、五七三、三九六	一七、七
3	四、九五、〇七	一、八
計	一〇〇、〇〇〇	100.0

(二) 樹種及輪伐期、施業期(第一作業級)

本項は木曾御料林に於ける一般施業方針なれども順序として掲記する

樹種、ヒノキ  
輪伐期、百二十年  
施業期は二十年を一施業期とし、輪伐期百二十年に對し第一より第六施業期まである譯で、第一施業期を分ちて前半期と後半期とし(各一〇箇年)十年目毎に施業

案檢訂の際第一施業期前半期に於て斫伐すべき箇所を(區劃班)定め、而して毎年官行事業開始前年に於て、當該管轄の出張所長は此前半期に於ける箇所より其年度に於て斫伐すべき區劃班を、事業上の便益を稽査して撰定し帝室林野管理局長官の指令を受けて決定するのである

(三) 斫伐順序(第一作業級)

詳しく専門的内容に就ては私として説明し難いのであるが、本區に於ける大體の斫伐順序は左記の事項に基いて立案されたものである。

- (一) 粗悪林及老齡林を先に撰びたる事
- (二) 交通設備の進歩程度を考査したる事
- (三) 本區に於ける恒強風は、西と南西との間に於て發し又主溪谷も凡そ此方向に流れ居るを以て、斫伐順序の定則により、一般的に谷口より谷奥へ、即ち下流より水源地向はしめたる事

(四) 年伐材積及年伐面積(第一作業級)

第一作業級の總蓄積は、六、一三三、〇七一石、生長量三一、五七四石なるが故に此年伐材積は  

$$6,133,071 + 31,574 = 6,164,645$$

$$\frac{120}{2} = 608,232$$
 即ち六萬六千八百二十石である。又總面積は、四、四八六町三分六厘であるから其年伐面積は  

$$\frac{4,484,86}{120} = 37,372$$

即ち三十七町三段九畝となるのである。

(五) 第二作業級たる造神宮備林の斫伐面積及斫伐材積

本作業級の目的は前記の通で即ち御用材たるべき大樹の養生であるが、是が仕立法として間伐作業を施して直徑の肥大生長——即ち大木を生育せしむるのである而して其總蓄積二、四七六、八四六石(生長量二二、六六九石)中斫伐すべき材積及面積は左の通である

斫伐面積 一、一四四町五六(全面積)部 合 一割以内

斫伐材積 二七四、一五一石

(六) 第三作業級たる造神宮臨時備林の斫伐面積及斫伐材積

本作業級も同じく間伐に依て御用材の養成を目的として居る事は前述の通であるが、總蓄積一、〇九四、〇〇五石(生長量五、七九九石)總面積七六三町三段九畝中間伐すべき面積及材積は左の通である

斫伐面積 五〇二町三三

部 合 五分以内

斫伐材積 六一、七三三石

以上で施業案の概略は盡きたのである。次説より造材事業、運材事業、人夫狀況として拙述する事としたのである。

二、造材事業

(イ) 小川伐木事業所に於ける改良造材法

從來の木曾式伐木法に於ては、主として斧

(一) 利益點たる得材割合の増加は、何人と雖も肯定し得る事

第一の利益點たる得材割合の増加は、何人と雖も肯定し得る事である。今更私に、説明するまでもないが、其大體を云へば、舊來法の玉切(前記説明)は斧を用ひるから木材の最も貴重なる部分を三寸乃至五寸位、造材一本毎に切取らなければならぬが、鋸造材は只鋸にて切斷し切斷面の面を一寸程取るに過ぎないのであるから少々の粗末もなく造材し得るのである。而して是が改良法に依て舊來法より幾何の材積の増加率があるかと云ふに、是は實際に試験する事が出来なかつたので明確の數字は分らぬが、凡そ千分の五乃至一〇位の増加率は充分ある様で是が現象として大正五年度以降の當伐木事業所の官行伐木に於ける造材割合は非常に豫定より増加して來たのである。

第二の利益點たる不熟の杣夫にても造材に使用し得らるると云ふことは、前記にも述べた様に斧造材は餘程熟練された木曾飛驒地方の専門的杣夫でなければなし能はぬのであるが、造材は斧造材に比すれば非常に簡便で作業も容易であること云ふ點から、苟くも伐木事業に人夫として従事し、人夫の名の附いて居る者ならば何人と雖も易々として作業し得らるると云ふことである、此邊の事情に就ては實際直接に伐木事業に従事して居る私達の充分に認められて居るのであるから明に斷定し得る事である、故に近來熟練された杣夫の少い時に於て如何なる勞働者でも此造材に就業し得らるのとは林

業經營者として便利且經濟上得策であるのみならず、彼等森林勞働者から云つても職を失ひ窮した場合に於て幾分なりとも就職の便益を受ける事が出来るのであるから如何に本造材法が凡ての點から考へて見て著しく有効であると謂ふべきではないか。

(ロ) 改良運材の造材に及したる主なる事項

凡そ森林は峻嶒幽谷の地に多きが故に、森林地内に於て如何程の林産物、如何程の雜種物が生産され、伐採若しくは採伐せられ處では是を搬出するに多額の經費を要し收支はなければならぬのである。然るに當區に於ては去大正五年森林鐵道の完成を始め、種々の新式運材設備が成就せられたので、是が爲往時に於て到底想像だに及ばなかつた雑多の林産物が毎年續々と造成利用せらる、様になつたのである。就中造材せらる、用材の樹種の増加したのは最も顯著なる現象で往時水運の際に水中深く沈んで如何にしても搬出することの出来なかつた比重多き潤葉樹例へば、ナラ、ミズメ、ブナ等を始め、ヤナギ、カバゴンゼツ

等の用材が造材搬出せらる、様になつたのである。尙他の雜種物として針葉樹(主としてナラ)の薪材、ヒノキ、サハラ等の枝條から採取した薪材、ヒノキ、サハラ等の根株から利用する屋根板、用材を造材した

(二) 造材の方針

本事業區を分ちて

- 第一 皆 伐
- 第二 造神宮備林
- 第三 造神宮臨時備林

第一は、説明するまでもない林産物の收入を目的とする經濟林であり、第二は神宮御造營に要する御用材を養生するを目的とし、第三は、第二と同一目的であるが、第二と異なる處は第二の、遠き將來に於て御用材となるべき大樹を産出せんとするに對し、第三は現在若しくは近き將來に於て御用材に備へたる森林である各作業級の面積は左表の通である

作業級	面積(畝)	割合%
1	四、五二、三二	七〇、五
2	一、四四、五七三、三九六	一七、七
3	四、九五、〇七	一、八
計	一〇〇、〇〇〇	100.0

(二) 樹種及輪伐期、施業期(第一作業級)

本項は木曾御料林に於ける一般施業方針なれども順序として掲記する

樹種、ヒノキ  
輪伐期、百二十年  
施業期は二十年を一施業期とし、輪伐期百二十年に對し第一より第六施業期まである譯で、第一施業期を分ちて前半期と後半期とし(各一〇箇年)十年目毎に施業

案檢訂の際第一施業期前半期に於て斫伐すべき箇所を(區劃班)定め、而して毎年官行事業開始前年に於て、當該管轄の出張所長は此前半期に於ける箇所より其年度に於て斫伐すべき區劃班を、事業上の便益を稽査して撰定し帝室林野管理局長官の指令を受けて決定するのである

(三) 斫伐順序(第一作業級)

詳しく専門的内容に就ては私として説明し難いのであるが、本區に於ける大體の斫伐順序は左記の事項に基いて立案されたものである。

- (一) 粗悪林及老齡林を先に撰びたる事
- (二) 交通設備の進歩程度を考査したる事
- (三) 本區に於ける恒強風は、西と南西との間に於て發し又主溪谷も凡そ此方向に流れ居るを以て、斫伐順序の定則により、一般的に谷口より谷奥へ、即ち下流より水源地向はしめたる事

(四) 年伐材積及年伐面積(第一作業級)

第一作業級の總蓄積は、六、一三三、〇七一石、生長量三一、五七四石なるが故に此年伐材積は  

$$6,133,071 + 31,574 = 6,164,645$$

$$\frac{120}{2} = 608,232$$
 即ち六萬六千八百二十石である。又總面積は、四、四八六町三分六厘であるから其年伐面積は  

$$\frac{4,484,86}{120} = 37,372$$

即ち三十七町三段九畝となるのである。

(五) 第二作業級たる造神宮備林の斫伐面積及斫伐材積

本作業級の目的は前記の通で即ち御用材たるべき大樹の養生であるが、是が仕立法として間伐作業を施して直徑の肥大生長——即ち大木を生育せしむるのである而して其總蓄積二、四七六、八四六石(生長量二二、六六九石)中斫伐すべき材積及面積は左の通である

斫伐面積 一、一四四町五六(全面積)部 合 一割以内

斫伐材積 二七四、一五一石

(六) 第三作業級たる造神宮臨時備林の斫伐面積及斫伐材積

本作業級も同じく間伐に依て御用材の養成を目的として居る事は前述の通であるが、總蓄積一、〇九四、〇〇五石(生長量五、七九九石)總面積七六三町三段九畝中間伐すべき面積及材積は左の通である

斫伐面積 五〇二町三三

部 合 五分以内

斫伐材積 六一、七三三石

以上で施業案の概略は盡きたのである。次説より造材事業、運材事業、人夫狀況として拙述する事としたのである。

二、造材事業

(イ) 小川伐木事業所に於ける改良造材法

從來の木曾式伐木法に於ては、主として斧

残木から製造する木炭等の色々の林産物が採取若くは造成せらる、様になり一般需要者に供給せらるる範囲が擴大されたと同時に頗る集約的林業が實現し得られた事になつたのである。尙又時々諸方からの注文に應じて種々の木材が造成せらる、様になつた事、例へば電柱材、飛行機材、船舶の橋材等の如き比較的長間材のものである。(本説は造材の利用範圍を擴大せしめたこと云ふ事項で造材に關聯した事であつたから(ニ)造材(ロ)として説述したのである)

(ハ)ガソリン鋸(一名自動鋸)

に就て

最近、伐倒木を切斷するにガソリン動力を利用して製られた原名「Gasoline」を稱する鋸が米國に於て創作されたので當事業所に於ては大正八年に此機械を購入して、目下製薪に使用中であるが、其機械の要目を記せば左の通である。

- 價格 六百圓
- 重量 三十八貫
- 馬力 四馬力
- 鋸ノ長サ 大一六呎 小一四呎
- サイクル ニサイクル

詳細の事柄は實物に依らなければ述べられぬが其切斷力の偉大なる點に於ては、實に驚嘆に値する程で、試験に依ると直徑二尺五寸のナラ伐倒木を切斷し終るまでに僅々十分乃至十五分しか要せぬのである。只私達の少しく缺點と見る處は急峻な山地に於

て一々運搬使用するに困難なので、人力には多くの勞力を要する點に於て、又作業をするに移動する事の少ない點に於て、前記の通り製薪事業に本機を専用して居るのである。然し是は未だガソリン鋸が充分進歩の域に達して居らぬのであるから、如何なる場所、如何なる造材作業にても使用するに便利である様に本器の改良を望むと共に、もう一步を進めて元切に代るべき有効な自動的鋸の創製されんことを冀ふのである。(續)

山小屋雜話

木曾の山人

一、初夏の頃

初夏の頃の伐木生活は忙がしい。造材が初まる、山落の準備がある、追々に諸國の人夫が集まつて来る。夫れ等の雜務で日もまた足らない有様である。海拔四千何百尺、雲と霧との世界の中に、粗末な一時の小屋掛住居、甲も乙も内も、里懐し想な眼に限りなく續いた、檜、樅の林を見る。まだ消え残つた雪を見て居た間に、いつとなく針葉林の此處彼處に、山櫻の咲くを見る様になると、流石に仙人生活も里戀しく人懐しいものである。タラの芽が食膳に登り、たま〜捕れた、岩魚の鹽焼きが、夕食に出る。

一、人夫達の住居

面に印して居る兎では無い、犬に似て大きな足跡である。

「毎晩来た奴だ、なんだらう」

と一人が云つた。

「さあ、狸の様でも無い」

と、咄し乍ら數歩行くと、犬の糞に似た毛交りの新しい糞を見た。

「狼だッ」

と三人が殆ど同時に叫んだ。

凄灰色の眼で白睨れた様に三人は驚いた其晩、其小屋に彼等は寝なかつた。

H技手が其咄を事業所に持つて来た。

「嘘の皮だよ」

伐木に二十年も居る、強情のデブ君の掛員が云つた。

一、逆 柱

山に住む人夫達は、小屋の柱の逆さになつたのを忌む。

夫れは極めて粗末な、小さい處の堀立小屋である。然れ共、住んで見れば已が住居に相違は無い。

一夏、秋の住居を作るに、先づ彼等は方位を見る、一本一本の針葉樹の柱には不絶細かい注意を拂ひ、必ず鬼門を除けて作る。

或る山での出来事である。

二三日續けて其小屋に住む人夫が負傷した強情で通り切つた其人夫小屋の組頭も、遂に不思議な心に捉はれた。

「さか柱じやないか」

と迂敬臭さ想に小屋内を見巡した。

掛員の住宅も假小屋なら、人夫達の住む處は一層酷い、三間に七間の堀立て小屋、床の低いのが如何にも、心無く思はれる。

而し乍ら、と甲掛員の禿頭が云つた。昔は屋根も檜や樅の皮なら、床は丸太を打ち割つて並べたものだ、其頃の背中の痛たさ壁は樅の枝位でやつたものだ。

夫も佳也。寝て居て星影の美しさを眺め、耳に駒鳥の啼く音を聞く、文學的に見れば、美しい詩であり畫である。

疲れて歸つた人々は、大きな爐に倚る。僅に圍つた風呂から、ゆら〜と湯氣がたてば、他愛もなく、笑い戯れて二人位づ、一日の汗を流す、飯は白いが、副食物は乏しい、勞働の後に來る快よき食欲、何ぞ、副食物のカローラを論じて居やう。

「甘ま想だな」

カルクス錠や、人參エツキスばかり、呑んで居る、I掛員が、つく〜云つた。

一、狼の糞

生活が單調すぎるご何事かを希求する心が起る。伐木の山小屋生活は單調の、代表者である。

「變つた事はないか」

誰も彼も倦み疲れた心に刺激を求の様とす。

大正五年も秋に近い頃である。處は山の中も中、王瀧御料林の鐵川の山小屋で、秋早い山中は既に紅葉の世界となり、往き交う

其日の事である。

初秋らしい高山地の白雲が空に流れた。あか〜照り渡る秋の日は、働く心を動かさずには居れない様な快よい日である。

平坦な小谷に添ふて、木材は堰の裝置を徐々に流れ下つた。人夫達の懸聲やら鼻唄やら、勞働と云ふ文字其者の示す様な、苦しい俤は更になかつた。

今日初めて出た、人夫達の内十八になつたばかりの若い人夫は、谷川に添ふて作業地を下つて來た、少しく懸崖になつた川岸に來ると、轟然たる響と共に一抱へ余りの岩石が、何故ともなく落下した、其利那不運にも、今しも通り掛つた若者を押し倒し美しい澄み切つた谷川に陥ち入つた。附近に作業した人夫達は、直に夫れを發見して、數人は谷川に入り岩石を除けて若者を救ひ出した。

左腕を全く挫折した若者は。

「大丈夫だ」

と云つたなり人々の体に倒れか、つた。劇しい出血は刻々に此の不幸なる若者の生命を縮めて行つた。

幾人かの人夫達は、此の若者を小屋に連れ

白雲も冷たき風に吹き流され、谷川の囁きも金石の心を帯ぶる頃の事である。秋季伐採の造材地に伐木に從つて居る袖小屋が、水近き谷間に檜林の空地を見出し、唯一棟淋しく在つた。農事か何か七人ばかり居る中の幾人は、生れた國に一時販り、僅か三人日々の勞働に疲れた身を爐邊に寄せて、雜談に耽つた或夜である。カサ〜と小屋の四邊を窮ふ獸の音がした。

「なんだ狸か」

と甲が云つた。

「いや、憊んな山の中に、狸は居らんぞ」と乙が云ふ。

山には馴れ切つた袖共である。がた〜の音を押し明けて外に出て見たが、何の獸らしい姿もなかつた。

三人は又雜談を始める、またかさ〜と恰も小屋の壁を掻く様な聲がした、見た時に居なかつたので少し氣味悪く思つたが、いつ知らず皆々深い眠に落ちる。跡には赤い樺火が燃ゆる。明くる夜も、また其翌くる夜も、其夜と同じ獸の襲來があつた。其明けの日で事である。三人の袖達は自が受持ちに行かうと、小屋を出た。高山地の雪早く僅かの初雪が路に白く積つて居る、其時の事である。一人が雪の中に獸の足跡を發見した、夫れは袖小屋より順次に細い路を、造材地の方



友 林 蘇 岐

新卒業生任地

- 帝管局木曾上松出張所 伊藤 良雄
- 福島縣安達郡高川村中山宿片倉林業部 岩井泰二郎
- 帝管局本局沼津出張所 小縣 正幸
- 長野縣廳土木課 小松 順市
- 帝管局甲府出張所 前野 義宗
- 松本公有林野官行造林署 市岡 巖
- 北海道農大實科 小林孝三郎
- 本縣下伊那郡平岡村滿島 宮澤 孝
- 盛岡高等農林學校 宅見 剛二
- 朝鮮李王家 山田 憲夫
- 松本公有林野官行造林署 有賀 三男
- 岐阜公有林野官行造林署 片桐 藤吉
- 愛知縣廳 原 宗重
- 朝鮮咸鏡北道鏡城住友林業事務所 模田 良市
- 廣島縣廳 近藤 清美
- 駒ヶ根村萩原自宅 原 主水
- 名古屋鐵道管理局 福井 浩

- 福島町稅務署 大島 保男
- 帝管局沼津出張所 安藤 覺
- 全局大磯出張所 小幡 榮一
- 北海道廳 桃井 武夫
- 帝管本局林務課 石原 元
- 帝管局上松出張所 片田 敏郎
- 山梨縣廳林務課 堀内 英一
- 朝鮮江原道高城郡廳 門田 鰲
- 樺太廳柘植部林務課 藤野 千束
- 農商務省工務局工務課 鈴木 壽雄
- 青森大林區署 宮澤 要
- 樺太豐原第一明豊寮 田近 三郎
- 帝管局福島出張所 高田金二郎
- 東京目黒林業試驗場內森林測候所 大井吉日兒
- 帝管局岐阜縣付出張所 須田 順吉
- 松本小林區署 北原 隆頼
- 滿洲木公司 加藤和一郎
- 東京目黒林業試驗場內森林測候所 永井 武治
- 帝管局野尻出張所 岡田 廣平

○北海道旭川營林區署 千葉 清種

塚越先生謝恩金 募集廣告

肅啓新緑の候益御清適之段奉賀候陳者大正七年四月以來四ヶ年間本校教諭として子弟教育の爲に御盡瘁せられし塚越尙夫先生に今回千葉縣安房農業水産學校教諭に轉任致され候に就ては此際謝恩金を募集し聊か先生の勞に酬ひ度と存候間左記御諒知の上應分の御寄附賜度此段得貴意候也

大正十一年五月

校 友 會

卒業生各位 左 記

- 一、送金方は振替口座に依るときは名古屋三五五番木曾山林學校宛に若し御都合上郵便爲替に依るときは木曾山林學校内杉山義次宛に願度候
- 一、締切期日は七月末日限り
- 一、領收證は林友誌上を以て御報告可致候

大正十一年五月廿三日印刷  
大正十一年五月廿五日發行

長野縣西筑摩郡福島町四番地  
編輯兼發行人 安井正夫  
長野縣松本市小柳町八番地  
印刷 劇人 淺川吉藏

長野縣松本市小柳町八番地  
印刷 劇所 淺川浩版所  
長野縣西筑摩郡福島町八番地  
發行所 金澤書店

【定價金參錢】